

綴葉

てい
よう

'24 11

No. 432

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

阿部幸大著『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』

筒井功著『日下を、なぜクサクと読むのか』

特集／舐めたらあかん、新書の力

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/

 univ. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

苦しむのはこれを読んでからでいい——執筆論の名著、いかに誕生

まったく新しい

アカデミック・

ライティングの教科書

阿部幸大著 光文社



どうやらものすごい話題になっているらしい。ルネでも上位にランクインしているようだ。『まったく新しい』って言い過ぎじゃない？という疑問を持つ君、そう、その君だ。今すぐ回れ右してルネでこの本を買ってきなさい。どうせ執筆の苦しみを味わうことになるのなら、この本を読んでからでも遅くはないはずだ。

◆新しさ①「アーギュメント」から始まる執筆論

さて、本書では論文やレポートの書き方が論じられるのだが、その新しさはどこにあるのか。本書の何よりも意義は、問いではなくアーギュメント——論証が必要な＝反論が可能な主張——を執筆プロセスの根幹に打ち出した点にある。本書が指摘するように、従来のライティング本では問いが起点とされがちであった。なるほど、問いは論文の根幹にして全体の質を支配する——確かに一理はある。

しかし、筆者曰く「問いの有無は論文の成否における条件とは本質的に関係がない」。重要なのは、アーギュメントが先行研究に対して持つアカデミックな価値である。反論すらできないような単なる事実や方法論の提示は主張として弱く、アカデミックな価値を持ち得ない。むしろ、その正しさを論証する営みこそが研究であり論

文執筆なのだ。これは当たり前に見えるけれども、大半の学生にとっては目から鱗に違いない。「私の問いは、価値のあるアーギュメントの体を成してなかったかもー」と。

◆新しさ②実践的な論文執筆のウラ側

本書のもう一つの新しさは、文章術ではなく執筆論であること。巷のライティング本では、主語と述語の一致やトピックセンテンスの重要性など「その先が知りたいんだけどな……。」という文章術ばかりが紹介されている（ような気がする）。だが本書は一味違う。

先行研究のどの部分をいくつ引用すれば良いのか？ そのためには本をどう読めばいいのか？ パラグラフに書くべき情報をいかに構成するのか？ といった私たちの「結局のところ」の悩みに、本書は極めて実践的に応えてくれるのだ。本書では（なぜか）アンパンマンについての論文を書くプロジェクトを事例として講義が進むのだが、その説明は簡にして要を得ている。筆者の経験と実績に裏付けられた執筆論は、どれも泥臭く（だからこそ）信頼に足るものだ。具体的な手と思考の動かし方をぜひ体験してもらいたい。

◆執筆の苦しみを越えて——執筆論から学問論へ

そして本書の射程は、学問論にまで広がる。筆者は宣言する——「論文を書くとは、世の中にならぬかの新しい主張をもたらし、それを説得的に論証することで、人びとの考えを変えようとする行為に他ならない」。「疑われもしないような常識」をひっくりかえすような仕事にこそラディカルな力が眠っている。私たちの言葉は、世界を変える力を持っているはずだ。

（一七六頁 税込一九八〇円 7月刊）
（浅煎り）

言葉は生活に眠る 地名研究のある一例

日下を、なぜクサカと読むのか

筒井功著

河出書房新社



地名の由来を追う地名研究において、最初の一冊とも言うべき書籍に柳田國男の『地名の研究』（一九三六）がある。本書の著者もこの柳田の一冊を何度も読み返し、親しんできたと述べている。そして、読むだけにとどまらず、「柳田のまねをして、自分なりの地名研究を続けてきた」と。柳田の一冊は、アカデミアだけでなく多くの在野の研究者を生んだ。本書もまた、読者を研究に駆り立てるような、そんな一冊になる予感がする。

本書は、表題のクサカを始め、いくつかの小さい地名についての由来の調査をし、それらの語がかつて持っていた意味を再現することを目指す。本調査の特色は三点——小さな地名（特に小字が多い）に焦点を当てること、同じ地名を多数挙げて比較すること、その土地へ実際に足を運ぶことである。著者・筒井は、現地に赴くフィールドワークこそが地名研究だとしている。車に乗り、鉄道に乗り、そして歩いて、ひとつひとつの地名をその目で確かめに行く。ときに現地のお年寄りにその土地のことを尋ねる。だから本書は、研究書であると同時に、紀行文としての楽しみも備えているのだ。

筒井が実際どのように地名の由来へ迫るのかは、ぜひ本書を読んでいただきたい。その語り口は、筒井の推論の流れそのものであり、

例えるならば、ミステリにおける推理パートだ。ここに要約してしまつのはもったいない。代わりに印象的な場面を一つ挙げよう。

筒井はあるとき、道の駅に茨城弁の掲示があるのを見つけた。「おらが村の方言」としていくつかの語が並ぶ中に「コサ（日陰地）」があった。筒井は「これを目にした瞬間、数十年来の疑問が解けた」という。ふいに訪れる研究が前進する瞬間の興奮が伝わる。コサとクサは音が近い。ここから、クサカの研究は一気に進む。

個々の地名とその元となった語の起源を知る喜びもさることながら、本書は、文献の調べ方や古い行政資料の入手法、現地に着いてからどのようにその土地を特定していくかといった調査の方法を知っておもしろさがある。本書を読みながら、自分の知っている地名について調べてみようとする人も少なくないはずだ。だが、役場の電子化によって古い地図は倉庫にしまわれ、過疎化が進んだ地域は住人がいなくなり、開発によって地形は姿変わりつつある。筒井の調査方法は、今後より難しくなっていくのかも知れない。だからこそ、調査可能な今がそのときだと、思わず手を動かす読者がいるはずだ。グローバル化・情報化社会では、地名は単なる固有名詞、つまり識別のための記号に思えるときがある。それ故に小字という小さな地名を選んだ本書は面白い。筒井は「地名は、過去のいづれかの時期に、そこで暮らしていた人びとが、だいたいは無意識のうちに残した言葉の記録」と言う。小字の多くは、その地で暮らす人々自身が必要として名付けたものだろう。だからその語は、当時の生活を想起させる。だから、記号は実体へと戻っていくのだ。（ひるね）

（二一〇頁 税込二九七〇円） 5月刊

日本の思想

丸山真男著
岩波新書

新書を舐めている人がいるとすれば、この本を読んだことがないのだろう。そう思わせてくれる、もはや古典となった一冊をご紹介します。

著者・丸山真男は昭和を代表する政治思想史学者。



そんな彼が、「近代日本」とも「現代日本」とも限定されない「日本の思想」について論じようとした意欲的な論考集が本書である。中でも最も読みやすく有名なのが『『である』ことと『する』こと』だ。国語の教科書で読んだことがある読者もいるかもしれない。

この小論は、借金の時効規定という民法の例に始まる。「請求する行為によって時効を中断しない限り、単に自分は債権者である」という位置に安住していると、ついには債権を喪失するというロジックのなかには、一民法の法理にとどまらないきわめて重大な意味がひそんでいるように思われます。そう言う丸山は、「である」と「する」の二種類の論理について、政治に学問・芸術、江戸時代から（1961年当時の）現代に至るまで縦横無尽に例をとって考察し、日本は両者の適用すべき領域を倒錯させてしまっていると診断する。

この優れた自己批判的小論は、30ページ弱という恐るべき密度で書き上げられている。比較的短くて手軽な「新書」という形式であることは、それが論じている内容とは関係ない、ということか。

そして、その他の章に関しては更に高密度だ。特に表題にもなっている「日本の思想」は、日本人が伝統思想と外来思想にどのように向き合っ／向き合い損ねてきたかを包括的に論じた白眉である。舐めるだなんてとんでもない。むしろ、打ちのめされながら読んでいただきたい一冊である。

(朝露)

(214頁 税込924円)

特集

舐めたらあかん、
新書の力

なめたらあかん〜♪

なめたらあかん〜♪

新書をなめずに♪

これ読んで〜♪

ということで、編集委員おすすめの新書を七冊紹介します。岩波新書からブルーバックスまで、漢詩から宇宙人まで、新書の可能性は無量大。新書の力を侮るなかれ！

(ばや)



漢詩 美の在りか

松浦友久著
岩波新書

知らない世界を覗き見たくて、新書の棚を眺めることがある。シンプルで力強いタイトルに惹かれて本書を手にとったが、内容もまったく引けを取らない。覗き見どころではない。遠慮がちに踏み込んだ私の手をぐっと引いて、中国の広大な土地と漢詩三千年の歴史を見晴らす場所まで連れ出してくれた一冊だ。

新書のコンパクトさを保ちながらも充実した内容の秘訣は、著者が「漢詩の魅力と生命力を知るための穴位」と呼ぶ5点。①詩人、②主題、③詩型、④詩跡、⑤訓読漢詩を各章で取り上げ、代表的な詩を紹介する。漢詩初心者もご安心を。白文・書き下し文・現代語訳が揃っているうえに、著者の解説は漢籍の教養を求める堅苦しいものではない。解説を聞いていると、今まで紙上で窮屈そうに並んでいた文字たちが、生き生きと律動して心に迫ってくるようだ。

本書ならではの^{こころ}特徴は、^{かたち}内容と不可分な形式に着目したリズム論にある。近体詩の代表的な詩型である五言律詩や七言絶句はなぜ定着したのか。著者の示す秀逸な作例は、同じ主題とモチーフでも詩型によってがらりと印象が変わることを教えてくれる。

漢詩のリズムと言われても、訓読で鑑賞する日本人には関係がないと思われたかもしれない。その点も本書は抜け目が無い。著者曰く、訓読漢詩は日本語の文語自由詩である。和歌や俳句にはない自由闊達なリズムや対句を含み、相互補完的に日本人の詩性や詩情を養うのに欠かせない役割を果たしたという。

海を越えて遠く日本まで見渡すことのできる眺めの良い一冊。読み終わるころには、知らない世界ではなくなっている。(くたくた)
(261頁 税込902円)



読書と社会科学

内田義彦著
岩波新書

世に読書論は多い。やはり皆、「いかにして本を読むか」ということが気になるのだろう。しかしこまごま読書論が多いと、どれを読めばいいのかさっぱりわからない。そこで私はこう言いたい。読書論はもはやこれ一冊で十分であると。新書だからと言って侮るなかれ。本書は幾度の再読に耐え得る強度を有している。

私は本書に、読みの根本姿勢を教えられた。著者は言う。「シュヴァイツァにしろ、デュプレにしろ、それぞれ精密に楽譜を調べ、徹底して楽譜に忠実であった。そしてそれゆえに、彼らのバッハ演奏は、それぞれ個性的である」。ここでの「楽譜」を「テキスト」に変えれば、これはひとつの読書論となる。個性的な読み、それは意外にも、テキストに徹底的に忠実であることから生まれる。好き勝手に読むだけでは個性的な読みは生まれないのだ。「楽譜に忠実でない演奏は、自己流で恣意的であっても、個性的などとはいえない」。

そしてここで重要なのは、テキストやその著者への「信」がなければ、テキストに忠実であることはできないということ。著者の言葉を一息で引用しておこう。「信じてかからなきゃ踏みこめないじゃないですか。『適当に』しか読めない。疑い深く白眼視しながら踏みこんで本文と格闘するなんてことはできない。(……) いわんや、分らぬところを二度三度、時間をかけて根掘り葉掘り深読みの労を払うなど、馬鹿馬鹿しくってできるわけがないですね。何か期して待つところがなきゃ。信ずるところがあって初めて、読み深めの労苦が払える」。「信」は読みを深めるのである。

であれば、まずは本書に「信」を持ち、読みを深めてみてはどうだろうか。(ばや)
(218頁 税込1012円)



宇宙人と出会う前に読む本 全宇宙で共通の教養を身につけよう 高水裕一著 ブルーボックス

新書と聞いて思い浮かぶジャンルは何だろう。政治、経済、哲学、歴史、……。理系分野がパッと出てくる人は少ないだろう。本書が属するレーベル、ブルーボックスは自然科学を中心に扱う老舗のレーベルであり、“科学はむずかしい”という先入観を改める表現と構成を特色としている。本書はそれを見事に体現しており、ブルーボックス入門に最適な一冊だ。

宇宙人と対面したあなたは数々の質問をぶつけられる。「あなたはどこからきたのですか?」、「あなたは何でできていますか?」等々。地球やタンパク質といった一惑星のローカルな答えでは宇宙人を満足させることはできないだろう。普遍的な全宇宙に共通の答えを返さなくてはならないのだ。本書は物語形式のもと、上記のような疑問を提示し、解説や答え、更なる発展と深掘りを繰り返し進んでいく。問いと答えの距離が近く指針が常にハッキリしている構成に加え、一目で分かりやすい図を用いた解説や重要な文章へのマークといった親切的な表現のおかげで置けることがない。更には「太陽が複数ある星のカレンダーはどうなっているか?」、「異星人の数の概念はどうなっているか?」といったSF的思索も盛り込まれており、むずかしさを忘れさせる面白さが詰まっている。

特に評者の興味を引いたのは、原子の普遍性を利用して周期表をロゼッタストーンのように言語や数字と対応させることでコミュニケーションを取ろうとする話だ。普遍性は数学のような抽象的思考に宿るものと思いついていたが、強固な具体性を持つ原子が全宇宙に通用するほどの普遍性を獲得していることに宇宙の神秘を感じ取ってしまった。(茂)

(272頁 税込1100円)



英単語の世界 多義語と意味変化から見る 寺澤盾著 中公新書

未知の世界に踏み込む楽しみもあれば、今ある知識をさらに深めるといふ楽しみもあるのが新書の良いところだ。我々学生にとって知らないものとは言えない「英単語」について、入門から一歩先へと踏み込んだ世界を見せてくれるのが本書である。

さて、まずはbarという英単語の意味を挙げてみよう。「酒場」や「(チョコレート)バー」などが身近だろうか。他には、「法廷」や「弁護士(業)」といった意外な意味もある。チョコレートバーと弁護士業を同じ語で表せるとは少々驚きた。本書は、この一見無秩序にも見える多義性を、「過去におこった意味変化が集積したもの」として、英語の歴史と意味変化を辿ることで説明していく。

意味変化にはいくつかパターンがあるという。まずは類似性に基づくもの。もともと「棒状のもの」を意味したbarは、棒状のもので作る「柵」の意味を獲得し、機能の類似性から、裁判官や弁護士と傍聴人等を分ける「仕切り」へと発展させる。その後「法廷」の意味を獲得するが、ここで出てくるのが本書3章で扱うメトニミー(換喩)——部分(仕切り)でもって全体(法廷)を表す——だ。場所を表す語(法廷)がそこで働く職業(弁護士)や組織を意味するようになるのは、日本語の「霞ヶ関」や「永田町」も同じだ。

面白いのが、19世紀に固形のチョコレートが作られるようになって初めて、barは「チョコレートバー」の意味を獲得するという指摘。社会の変化が語の意味変化の動機づけとなっているのだ。本書は意味変化の要因も扱う。すると英単語の向こうに、その語を使用してきた人間とその社会が見えてくる。(ひるね)

(224頁 税込858円)



社会を変えるには

小熊英二著
講談社現代新書

新書の魅力——薄さ手軽さ、デザインの統一感……。たくさんあるけれど、私は何よりも「多くの人々の手に広く届く」ことだと思う。専門知識をわかりやすく、時事ネタもスピーディーに。専門書ほど堅くも重くもないけれど、知の世界に踏み出す第一歩になるのが新書だ。

この魅力が存分に表れているのが『社会を変えるには』。出版は2012年——つまりは3.11と原発事故を経たデモの隆盛が執筆の背景にある（新刊の『連帯の政治社会学』も併せてご覧いただきたい）。標題通り、本書は「社会を変える」ことについて考えていくのだが、そのスケールは選挙や起業、革命には留まらない。そんな狭い話ではないのだ。小熊はより広い視野で現代社会の行き詰まり＝機能不全を捉えんとする。そもそも民主主義において代表を選ぶとはどういうことか？ という根本問題を古代から遡り、歴史・構造・思想的な見通しを与えていく。この壮大な思索のエッセンスをさくっと掴めるのが新書の良さである。

小熊は「現代社会では、中央制御室に当たるものはありません。だから、首相だけを替えても変わりません」と言う。現代では左派も右派も同じような行き詰まりを見せている（今の政局を想起してほしい）が、大切なのは表面的な事柄に振り回されず、より構造的な問題——自由と再帰性の増大——を捉えることだ。一体何それ？ という方はぜひ本書をご参照あれ。わかりやすい説明なので、高校生でも問題なく読めるはずだ。

本書は11刷まで版を重ねてきた。10年の歳月を経て、本書のメッセージは霞むどころかなおも力強さを増している。時代を捉え、見据え、そして変えるための一冊。（浅煎り）
(520頁 税込1540円)



人はなぜ物語を求めるのか

千野帽子著
ちくまプリマー新書

自分はどんな人間か、ということを説明するとき、人は過去へ過去へと遡り、自分をいまここへと連れてきた出来事の流れを思い浮かべる。それは同時に、自分はどのような世界で生きているのかを説明づける作業でもあって、そのとき自分の人生は、筋道立てられた何らかの物語としてイメージできるだろう。

本書はそのような「物語」——人間が己を、そして世界を把握するために用いる思考の枠組みに、揺さぶりをかける一冊だ。その物語とは結局、自分がつくり出したものであって、バイアスや決めつけに満ちている。なぜなら人間は、自分が何を知らないのか知ることができないからだ。そして自分の物語に組み込めないもの——他者との衝突、理不尽な出来事——と出会ったとき、なぜこんなことが、と人は苦しみ、ともすると相手を排除したり、さらなる決めつけに飛びついたりしてしまう。物語論の知見や、古今の哲学・宗教の洞察を参照しつつ、けれども軽やかな調子で、著者はそんな功罪半ばする「物語」との付き合い方を説いてゆく。自分が生きてきた物語を手離すことは恐ろしいけれども、それにしがみつくことをやめる自由もまたあるのだ、と。

本書は、若い読者向けに書かれたシリーズ〈ちくまプリマー新書〉の一冊。小中高と生きてきた自分の人生の物語が、これまでにない出会いや経験によっていままさしく揺さぶられている——そんな大学生のあなたにこそ薦めたい。専門知に深入することもはなく、内容が浅く広くに留まっていることも、本書の場合は決して瑕疵にならない。なんとすれば、自分の物語を相対化するには、そのような態度こそ必要だろうからだ。（水炊き）



(224頁 税込924円)

新刊コーナー

ぼくがエイリアンだったころ

トナーズ・ピンチヨ著
二宮大輔訳 ことばのたび社



『ぼくがエイリアンだったころ』。このタイトルだけでも目を疑うのに、本を開いてみると、主人公の親友はカート・コバーン本人らしい。あのニルヴァーナの伝説的ギターヴォーカルだ。そんなのあり？ となるけれど、それがあになるのが小説、とりわけポストモダン小説と一般に言われる小説の面白いところなのだ。

主人公のホーマー・B・エイリアンソンは九歳のある日、眠るのをやめてしまう。彼は気づいたのだ——自分以外のみんなが、実は何者かによって寝てる間に乗っ取られてしまった、人間ならざる何かなのだ。一度目を閉じてしまえば最後、もう「奴ら」の餌食なのだ。気づいた彼は、それ以来十九年間彼は目を見開いたままだ。閉じることのない彼の目に映るのは、故郷アバディーン、雨が止むことのない陰鬱な世界と、両親をはじめと

した、彼にとっては狂ってるとしか思えない人々ばかり。そんな日々を終わらせるのが、デビュー前のカート・コバーンとの出会いだった。カートは「システム」(ドラッグのことだ)の世界にエイリアンソンを導き、エイリアンソンは二〇年ぶりに目を閉じて眠ることができ——ここから、カートとエイリアンソンの人生が絡み合い始める……

九〇年代のカルチャーが随所に言及されており、近いようで微妙に遠い過去のアメリカの雰囲気を感じさせてくれる不思議な作品。

(三五〇頁 税込一九八〇円 9月刊)

(コーク)

学びのきほん

「書く」って、どんなこと？」

高橋源一郎著
NHK出版



「二時間で読める教養の入り口」をコンセプトとする「学びのきほん」シリーズ。

その最新作が本書だ。高橋源一郎が今回その作家人生で初めて明かすのは「書く」ことの秘密。その一端を今から覗いてみよう。

高橋の代表作に『さようなら、キャンケた

ち』がある。じつはこの作品はほほ何も考えずに書いたと高橋は回想する。決まっていたのはタイトルだけ。中身はまるで決まっていなかった。だから一頁目は少し悩んだ。しかし「昔々」と書き、ほんの数呼吸して「人々はみんな名前をもっていた」と続けると、その後は息もつかずに書き続けた。「わたしはうまく書けた、という思いより、いったいなにが起ったのか、とびっくりしていた」。

このとき文章を書いていたのは一休誰なのか。わたしのなかにはふたりのわたしがいると高橋は言う。「昼間のわたし＝仮面のわたし」と「夜のわたし＝本当のわたし」だ。「昼間のわたし」が話すのは社会の検閲済みの言葉。私たちが普段話すのはこちらの言葉だ。しかし何も考えず原稿用紙に向かったとき、高橋は「昼間のわたし」を黙らせた。「検閲なんかくそ食らえ」。すると現われたのが「夜のわたし」だった。それは無意識に近いもの。こうなったらもう、わたしはただ「手」となって、「夜のわたし」の言葉を書き留めるしかない。わたしは「ゾーン」に入ったのだ。

考えて書いたものはつまらない、なぜならそれは「昼間のわたし」の言葉だから。「夜のわたし」の言葉にこそ「書く」ことの秘密がある。本書はそれを教えてくれる。(はや)

(一一二頁 税込四八二五円 7月刊)

スイマーズ

ジュリー・オッツカ著
小竹由美子訳
新潮クレスト・ブックス



私たちの人生の中の小さな亀裂。放っておいたそれが、取り返しのつかないくらい広がってしまうこともある。

物語前半の舞台は地下深くにあるプール。そこに通うのは、認知症の初期段階にあるアリスをはじめとさまざまな事情を抱えた人たち。彼らは、地上のしがらみから逃れるため、執拗なまでに泳ぎ続ける。水の中にある間は、自分が自分でいられる。彼らはそんなプールを愛していた。しかしある時、プールに小さなひび割れが見つかる。そしてこのひび割れが――。

物語の後半では、アリスと娘の生活の断片が、淡々とした筆致で語られる。記憶を失っていくアリスと、彼女との関わり方を後悔まじりに追憶する娘。我慢していたこと、見て見ぬふりをしていたこと。でも、もうやり直すことはできな。

本作の特徴は、章ごとに異なる語り方がもたらす独特な雰囲気にある。前半では、プー

ルの利用者が「わたしたち」の人称を用いて、後半ではアリスと娘が「彼女」「あなた」の人称を用いて表現される。当人にとっても、周りの人物にとっても辛い認知症の現実。これが二人称を用いて語りかけられることで、アリスと娘の記憶の断片の中に読者も否応なく引き摺り込まれていく。

回復不可能な喪失の悲しみと、私たちがどのように向き合えばよいのか？ きつとそこに、明白な答えなどない。それでも私たちは、痛みに向き合い、亀裂を抱えながらも生きていかなければならないのだ。

(一六〇頁 税込二〇三五円 6月刊) (荒砥)

夢のなかで責任がはじまる

テルモアシユワルツ著
ルー・リード序文
小澤身 and 子訳 河出書房新社



「一九〇九年だと
思う。どこやら僕は
映画館にいますよ
うだ――「僕」の前

で、擦り切れたフィルムが、サイレント映画を流しはじめる。一人の男が歩いている。僕の父親だ。一人の女を家に迎えにゆく。僕の母親だ。連れ立った二人は歩みはじめる。

コニーアイランドの遊園地を？ それともそれは人生だったと言ってもいいのだろうか？ ここからは読者の皆様に確かめてもらうのが一番だと思う。

先に引用した書き出しは表題作、「夢のなかで責任がはじまる」からの一節だ。なんとも奇妙なタイトルだと思っだろう。しかし、この短編は正真正銘の傑作、あのナボコフ（彼は概してアメリカ文学に点が辛いだけだ）が絶賛しているのだから折り紙付き。表題作を読んだあなたは、語り手の「僕」と同じように、「夢のなかで責任がはじまる」という映写機が照らす明かりに導かれて、続く短編を読み進めてみてほしい。するとそこには、一九二〇年代のお祭り騒ぎに遅れてきた青年たち、不確かな時代と自己に悩む彼ら――これは今を生きる僕たちだと思ってみてもいいのかもしれない――が、スクリーンの上で暗闇からぼんやりと浮かび上がり、動きはじめることだろう。作者を師と慕ったルー・リードの姿も、ふと画面を横切ったりするかもしれない。僕たちは愛憎半ばする思いで食い入るように画面を見つめつづける、そして――。

そして、この夢から目覚めた時、あなたはもう、前と同じところにはいない。(コーク)

(三〇八頁 税込三二九〇円 7月刊)

フェミニスト、 ゲームやってる

近藤銀河著
晶文社



ゲームをしていると、ふとその世界観に違和感を抱くことがある。なぜほかの

選択ができないのか、なぜ皆がこのキャラを敵対視するのか。こうした戸惑いは、ゲーム内の暗黙のルールや前提への疑問であり、更には背後にある社会の規範への批判的な問いかけである。本書は、フェミニズムやクイア理論といった批判理論の視点からこうした戸惑いとことん向き合い、ゲームそのものや規範を問い直す、画期的なゲーム批評である。

ピクミンやスプラトゥーンといった人気作からニッチなインディーゲームまで、各章で取り上げるゲームは多岐にわたる。プレイの感想や世界観の説明は要点をとらえていて、自分も手に取って遊んでみたくなる（実際、評者は二作品ほど購入した）。そして、親しみやすい文体はそのままに、鋭い批評に入っていく。有名タイトルでは、プレイ中の違和感を頼りにして、当たり障りなく丸められた表象の裏にある異性愛規範や能力主義、健常者

中心主義を鋭く指摘する。クイアやマイノリティの活躍や日常を描くゲームも積極的に取り上げ、その表象やゲーム体験の好きな点も不十分な点もありのまま指摘する。著者の率直な語り口は心地よく、自らが抱えていた戸惑いも晴れたような、安らかな読後感だった。ゲームボーイの時代からゲームは【男の子】のものとして扱われてきた。だが同時に、現実の状況を越えて参加できるゲームは、マイノリティにとっても人生の支えになっている。本書はこうしたフェミニストのものとしてのゲームを明るく照らしている。（たいやき）

（三二〇頁 税込一九八〇円 5月刊）

信じない人のための

〈宗教〉講義 新装版

中村圭志著
みすず書房



京都は宗教が息づいている都市だと思

う。数多の神社仏閣は言うまでもなく、町を歩くと思いの外、他宗教の施設も多くみられる。河原町や出町柳、北白川を歩けば十字架を掲げた教会が現れ、元田中にはモスクがある。一方で、宗教なんて自分の生活には

必要ないと思っている人も多いだろう。本書はそんな信仰を持ってない現代人に向けたフラシクな宗教入門書だ。

とはいえ、宗教の偉大さを説き、信仰に目覚めさせるための本ではない。むしろ著者は一貫して「宗教」を単なる社会システムとみなす立場をとっている。前半ではユダヤ教、キリスト教、イスラム教の系譜に始まり、仏教にヒンドゥー教、儒教と道教に至るまで、類似や対比を積極的に用いて特色を分かりやすく説明し、後半では現代社会における「宗教」への要請を多面的に考察していく。本書の目的は「宗教」という言葉が指すものを一歩引いた視点で総覧し、「宗教」に対する姿勢を柔軟に解きほぐすことだ。

「宗教」は近代西洋において誕生したと言える。合理的な社会システムが発展すると共に、生活に溶け込んでいたキリスト教的伝統は個人の領分に追いやられ、「宗教」として区別されるようになったのだ。こうした歴史観のもと、公共の場から排斥されてきた「宗教」を鏡として、西洋が生み出した近代的システムの問題点を指摘しつつ、オルタナティブとしての「宗教」を再考していく本書の姿勢は、近代を乗り越えようとする現代人にとって重要な示唆を与えてくれるだろう。（篠）

（二五六頁 税込三五一〇円 6月刊）

「モディ化」するインド 大国幻想が生み出した権威主義

湊一樹著
中央公論新社



「インド」という国に対するイメージと言えば……頭にターバンを巻いた人だろうか。それとも2ヶタの掛け算もできるような教育システムを持つこと、あるいは荘厳なタージマハルかもしれない。しかし、これはインドの現状から目を背けた、「大国幻想」にすぎない。

本書には、これまで世界最大の民主主義国家と呼ばれ、当然に民主主義が成立していると考えられていたインドに焦点を当てる。インドの現状が民主主義とかけ離れ、いかに権威主義的であるのが、様々な根拠とともにわかりやすく説明されている。特に二〇一四年にナレンドラ・モディ首相が政権を握った後、急激に権威主義体制が進んだことは、本書でも如実に記されている。

インドが権威主義体制をとるようになった理由としては、民主主義の形骸化とヒンドゥー至上主義の主流化が挙げられる。これらの影響は、主に非ヒンドゥー教徒、特にムスリ

ムに対する国を挙げての差別とヘイトという形で表れている。政治的な演説におけるヘイトスピーチはもろろのこと、二〇二三年四月に行われた教科書改訂における歴史の削除・圧縮、二〇一九年一月に成立した市民権改正法など、その手法は多岐に及ぶ。そして、暴力的対立もたびたび発生している。

出版直後には、通販サイトからも各地の本屋からも在庫が消えた話題作。南アジアに興味がある人をはじめとする多くの人に、経済や政治分野にも大きく関わってこる大国の現実を見てもらいたい。(フランチ)

(二八八頁 税込一九八〇円 5月刊)

世界の岐路をよみとく 基礎概念

比較政治学と国際政治学への誘い
中溝和弥、佐橋亮編 岩波書店



民主主義とは何なのか、なぜ政治に起因する暴力が世界中で蔓延するのか、なぜ核軍縮が進まないのか……。本書は、現代世界を理解するために必要不可欠な政治学の概念について、言葉の定義と学説の整理が行われている論集である。

理解しにくいと感じていた政治の概念や言葉の定義などがスッと入ってくることを特徴とするような説明。そして、各章において、該当分野では必修とされるような文献や学説が、わかりやすく紹介されている。評者は著者の授業を受講したことがあるのだが、そこで得た知識のピースが、わかりやすく文章化された本書を読むことで、カチッとほまるような感覚をもたらした。

インドやインドネシアなど、特定の国や地域に特定した話をしている章もあれば、国際紛争や核軍縮などのトピックの概要を示している章、そしてベイズ統計モデルをはじめとする政治学における分析手法について集中的に検討している章もある。多種多様で、目次だけ見ると一見まとまりのないような構成であるが、何かしらの繋がりを感ずる。東京大学大学院法学政治学研究所の藤原帰一先生のご退職を記念して、門下生が編んだ論集であるからだろうか。

注釈や引用文献が豊富であり、すべての章の後ろにブックガイドがある本書は、今から政治学を学びたいと考える人にはもちろん、知見をより深めたいと思う人にも適している。様々な情報が飛び交う現代において、自らの知見を深める一助となるだろう。(フランチ)

(三三八頁 税込四〇七〇円 6月刊)

連帯の政治社会学

3・11後の反原発運動と市民社会

ベアタ・ボホロティツ著

小熊英二／木下ちがや訳 明石書店



この国や社会をより良く変えたいと願ったとき、私たちはどんな手立てを取りうるだろうか。三・一一以降の脱原発運動では、国会前の大規模な抗議集会が世間を賑わせた。一方で、ポーランド出身の著者が取り上げるのは、研究や教育、法的支援など、直接的な抗議とは異なる営みの数々だ。華やかで目立ちやすい抗議行動と、それに比べれば枝葉に思えるような実践とを含めた運動の総体は、本書では「エコシステム」として捉えられる。さながら植物のように、各領域がいかに合流・連携していったのか、そのプロセスがダイナミックに描きだされる部分が本書のハイライトだ。

しかし、そうした緻密で膨大な記述は、その後の理論的な考察にうまく接続されていないように見える。結局のところ脱原発運動は日本社会に対してどれだけの効果をもたらすことができたのか、という冒頭で掲げられた問いは、説得的に論証されているとは言い難

い。ただ、それがそもそも困難な試みであるというのは著者も認めるところだ。

訳・解説を担当した小熊英二は、抗議行動を旗に例える。旗が立つこと自体に力があるわけではなく、強い風が吹いていることを示せた場合にのみ、旗は社会への影響力を持つことになるのだ、と。本書からは、当時の日本社会で吹いていた風の香りをうかがい知ることが出来る。そして、そこにたなびく旗を立てんとした者たちの、草の根の奮闘を味わうことができる。

(投稿・ねむる虫)

(三七六頁 税込三八五〇円 5月刊)

〈情弱〉の社会学 新装版 ポスト・ビッグデータ時代の 生の技法

柴田邦臣著 青土社



表題の〈情弱〉というネットスラングを見て、本を開くのをやめてしまっ

てしまった。本書は核心的な情報社会の課題を社会学的に問うているのである。

本書は、最新のビックデータなどの情報技術によって支えられている諸制度、例えば介

護保険制度や特定健康診断などをフリーコーの「生一権力」論に依拠して分析する。その分析を通して、情報化の過程が身体の内部までも情報化していく、情報化の新たな段階としての「ポスト・ビックデータ社会」の論理を説明するのである。その論理とは、ビックデータによって提示された〈規準〉を人々が自己責任によって内面化し、自らの生を「自粛」するようになるというロジックである。

つまり、生きるうえで必要な支援を、AIによってレコメンドされた適正量をもとに自粛することで、結果的に人々が自らの生そのものすら「自粛」していく社会のすがたである。しかし、これはありうる可能性の一つに過ぎない。確かに、ビックデータに依拠する社会制度が私たちの生を「擬制」、「自粛」、「適正化」するように機能することは間違いない。しかし、各々が技術に内在する機能を（「生の技法」）リテラシーによって乗り越える可能性もある。本書は、その可能性を〈情報弱者〉とみなされがちな障害当事者たちの実践を検討することで示すのである。

技術の発展とともに進みつつける社会の変化をどう考えるうえで、重要な視座を与えてくれる一冊だ。新版に付された能登半島地震についての分析も必読だ。

(二二四頁 税込二四二〇円 6月刊)

(投稿・定信)

吾妻鏡

—鎌倉幕府「正史」の虚実

藪本勝治著 中公新書

『吾妻鏡』は鎌倉幕府が公式に編纂した史書であり、歴史資料として大いに参照されてきた。しかし、そこには多くの虚構や脚色が含まれていると(近年明らかにされており、本書副題の「虚実」もそのことを指している。

では本書の目的は、検証によって「史実」に迫ることなのか。否。本書はむしろ、「吾妻鏡」がいかなる意図で、いかにして過去を語り直したのか、という「虚構」に迫る。

冒頭の頼朝挙兵を例に挙げよう。『吾妻鏡』は、これを義兵として位置づけようとする。

なぜか？ それは幕府が、源氏・北条氏の支配の歴史を正当化するためである。ではいかにしてか？ 出来事を脚色、捏造するだけではない。語りの妙によって、地の文に価値判断を織り込んだり、読者の視点を自然に北条氏に引き寄せたりしているのである。

これは本書の分析の一例に過ぎない。しかし、過去を語る営みが語り手の「現在」と不可分であることをよく示している。本書は『吾妻鏡』を深く検証しつつ、そうした「歴史」の本質にも迫る一冊なのである。(朝露)

(三〇四頁 税込二一〇〇円 7月刊)

沈黙の中世史

感情史から見るヨーロッパ

後藤里菜著 ちくま新書

あなたは今、この文章を声に出さず読んでいるはずだ。しかし、黙読という技術は比較的最近のものである。現代において薄れてしまった言葉と音の関係。本書は、その裏に潜む沈黙に焦点を当てて西欧中世を紐解いていく。

聖職者にとって、沈黙は罪を避けるために必要なものとされた。彼らは祈りの言葉を除く会話は嘘や偽誓に繋がりが得ると考えたのである。他方、平民や女性といった立場の弱い人々にとって、沈黙は統治者から課されるものだった。権力によって彼らは沈黙を強制された。同じ沈黙でも、その作用は全く異なる。

しかし盛期中世以降(一二世紀)、生産力の向上や都市の発達による教育レベルの上昇によって状況は徐々に変容していった。平民や女性の声が文学作品等に現れることが多くなっていく。こうして、彼らに課された沈黙は少しずつではあるものの破られていく。

古代世界と比較して、どうしても暗黒期のイメージがぬぐえない西欧中世。その実像の一面を、新書らしからぬ豊富な読書案内と共に詳らかにする一冊。(荒砥)

(三三〇頁 税込二一〇〇円 7月刊)

現代写真とは何だろう

後藤繁雄著

ちくま新書

今日、写真を取り巻く環境は激しく変化している。近年では生成AIが台頭し、写真は「真実を写す」ものから、「生成される」ものへと変わり果ててしまった。そんな現代において、我々は写真とどう向き合えばいいのだろうか。これが本書の中心的な問いだ。

九〇年代から国内外で写真展をプロデュースしてきた著者が、写真の現代アートとしての魅力を論じるのが本書だ。中平卓馬、篠山紀信といった往年の日本人写真家から、S・シヨア、N・ゴールディン、今春の京都での展示が話題となったV・サッセンまで、各章では特定の写真家を取り上げ、その活動が現代写真に与える影響を考察する。著者による写真家へのインタビューや後日談が随所に盛り込まれており、時代と写真の変化にどのように応答して各々が作品を作ってきたのかよく分かる。長年現場に携わってきた著者にか描けない視点であり、本書自体が近年の日本の写真史の史料となりうる凄みを感じた。

論が自由に進むため読み易くはないものの、写真への明晰な洞察が得られる。(たいやま)

(三三四頁 税込二二二〇円 8月刊)

論理が時間に触れるとき——有栖川有栖のロジックを語る

有栖川有栖を知っているだろうか？ 今年で作家業三十五年目を迎えたベテランの推理作家で、そのキャリアは一貫して、端正なミステリーを書くことに捧げられてきた。

ルイス・キャロルを連想させる筆名の印象通り、その作品はパズルのように組み立てられた論理性に加えて、どこか幻想的な雰囲気を感じている。とはいえこれは、論理が破綻しているという意味ではない。有栖川の小説の幻想性はむしろ、論理を積み上げた先こそ宿るのだ。どういふことか。評者がとりわけ愛好しているふたつの作品を挙げて、その実例を語ろう。

◆推理が時間を止める——『スイス時計の謎』

犯罪学者の火村英生が快刀乱麻の推理で犯罪者を追い詰める〈作家アリス〉シリーズ、そのなかでも粒揃いの中短編集である『スイス時計の謎』は、作者が「ここから見て本格ミステリーという作品で固めた」という一冊だ。わけてもその表題作は、犯人は誰か、という一点に絞った、純度の高い中篇である。



この作品において、火村が駆使する推理は論理パズルのようなそれに近い。手掛かりとなるのは、殺人現場から腕時計が持ち去られたこと、たったそれだけ。けれども火村はこの事実を分析し、精緻な推理を重ねることで、容疑者をひとりまたひとり減らしていく。そうしてたどり着くのは、具体的な証拠がないにもかかわらず、犯人がただひとりしかあり得なくなっているという逆説的な事態だ。つまり、具体性を欠いた抽象的な論理が、犯人を捕らえてしまう。

このとき火村の推理は、単なる合理的推論を超えて、どこか決定的な凄みを帯びる。時計を盗んでしまった時点で、犯人の運命は決まっていたのである。それが明かされた瞬間、読者は、まるで時間が止まってしまったかのような感覚に陥ることだろう。作者をして「どうしてこんな推理が成立するのか奇妙な気がする」と言わしめた、この驚異を味わってほしい。

◆推理が時間を立ち上げる——『女王国の城』

『スイス時計』が推理によって時間を止める作品だったとすれば、反対に推理によって、持続されてきた長い時間が浮かび上がってくるのが『女王国の城』だろう。こちらは江神二郎率いる英都大学推理小説研究会の面々を主人公とした〈学生アリス〉シリーズの一作。新興宗教団体の施設への潜入とそこから脱出を縦軸として、複数の事件が絡み合う本作は、有栖川作品でも一番の分量を誇る大長篇。けれども犯人を指摘するための推理は、驚くほどシンプルだ。

探偵役である江神はここで、人の移動についての検討をおこなう。算数の文章題を解くようなその推理から導かれる結論は、けれども読者の虚を衝いて、閉じられた世界に風穴を開ける。そこから流れ込むものこそ、時間だ。外界から隔離されたような作品世界にも、時間が流れているのだと読者は知る。江神が突き付ける犯人の条件は、そんな時間の流れから取り出されるのである。

評者が有栖川作品に惹かれるのは、このような瞬間においてだ。論理の階梯を二段一段と登りながら、小説は人間の領域を超えた時間の真理、あるいは世界の神秘に触れる。そこで浮かび上がる鮮烈なイメージは、推理小説だからこそ描き出せるものだ。（水炊き）

空想世界に遊ぶマイナーポエット——牧野信一

大江健三郎と古井由吉の対談集『文学の淵を渡る』（新潮文庫）。そのなかに「百年の短篇小説を読む」という回がある。創刊以来雑誌「新潮」に掲載された短篇について、二人が議論を交わすという趣旨だ。森岡外、志賀直哉、芥川龍之介とビッグネームが並ぶなかに、ひょっこり顔を出すのが牧野信一。大江と古井は「この短篇選の中で最上の作品」と絶賛する。「芥川を神経衰弱にしてみよう」とる奇っ怪な名手」とまで称される作家、果してその正体は？

牧野信一は、主に大正の終わりから昭和の初めにかけて活躍した作家だ。その文学的出発は、家庭内のいざこざを露悪的に描いた「父を売る子」など、オーソドックスな私小説。しかしその本領は、「ギリシャ牧野」と呼ばれる中期の特徴的な作品群にある。郷里小田原での実生活をベースにしつつも、その上に古代ギリシャ世界にあやかっただ自由な空想を広げ、夢と現実を緋に交ぜにした幻想的かつユーモラスな作風を確立した。

文学史では「新興芸術派とマルクス主義文学の二大潮流」とまとめられる時代に、片隅で独自の世界を育んだマイナーポエット。小林秀雄や三島由紀夫にも高く評価されたが、長らく忘れ去られていた存在だ。

『ギリシャ牧野』は一筋縄ではいかない。

牧野の手にかかれは、ただの馬がドン・キホーテの愛馬ロシナンテに、山の民家がピエル・フォンに早変わり。縦横無尽に展開される作者の空想に、慣れない読者は面食



らってしまつかもしれない。そこでおすすめしたいのが『牧野信一 センチメンタル幻想傑作集 嘆きの孔雀』（小鳥遊書房）だ。この短編集は作風の変化を断絶と見なさず、「センチメンタリズム」という一本の糸で繋ぐ。初期に書かれた少年少女小説を入口に、牧野の幻想が徐々に深められ、「ゼーロン」や「バラルダ物語」といった代表作に結実する過程を追うことができる。

『ギリシャ牧野』の世界に遊んだあとは、外側からその秘密を探ってみよう。『牧野信一と小田原』（夢工房）は、牧野の生涯を丹念に追いかけて、作品と先行研究を簡便に紹介するハンドブックだ。小田原にかかると幻想のヴェールを剥がすことは、牧野の本意ではないかもしれない。しかしそうしてみると、牧野の文学は単なる幻想小説ではなく、現実と分かちがたく結びついていることがわかる。



牧野に目をかけられた後輩作家・坂口安吾は、「F A R C E に就て」という文学論のなかで、こんなふうに語っている。

「一体、人々は、『空想』という文字を、『現実』に対立させて考へるのが間違いの元である。（…）人間自身の存在が、『現実』であるならば、現に其の人間によって生み出される空想が、単に、形が無いからと言って、なんで『現実』でないことがある。」

牧野にとつての小説は、きつとこの種の「現実」だった。だからこそ『ギリシャ牧野』の世界は、吹かれて飛ばぶような儚い夢ではなく、目の前の景色を鮮やかに塗り替える魔法なのだ。（くたくた）

編集後記

今年の5月号から編集委員に参加させていただいております、くたくたと申します。綴葉にはおもしろいペンネームの方が多いため、それになりました。寒くなってきて、くたくたに煮たお野菜が恋しい季節ですね。知人にはよく「しゃっきりしていないところが似ている」と言われます。

小さい頃は根っからのファンタジー育ちで、妖精と戯れたり、魔法のホウキで空を飛んだり……文字の向こう側に広がる夢のような世界に心を躍らせる毎日でした。

それがどういふわけか日本の近代文学、それも純文学にどっぷり浸かり、言葉の奥に広がる世界よりも、言葉の手触り、のようなものに惹かれるようになりました。魔法みたいなことはなにも起こらない、なんの変哲もない日常の1ページ、誰にとっても馴染みのある感情でも、それらにどんな言葉を与えるのか、そこに作家の人間性が見え隠れするようです。

そういう意味で、綴葉の編集会議は毎月いろいろな人の書いたいろいろな文章をつまみ食いできる、天国みたいな場所です。偉大な先輩方の背中を追いかけて、読む方も書く方も誠心誠意楽しんでいけたらと思います。どうぞよろしく願いいたします。(くたくた)

当てよう! 図書カード

今月号の新書特集はいかがでしたか。前半にはずらりと岩波新書が並びましたが、これは日本初の「新書」レーベルだったそうです。さてここで問題。「新書」創刊の際に岩波書店が参考にしたという「ペリカン・ブックス」とは、どの国の叢書レーベルでしょう？

1. アメリカ
2. イギリス
3. ドイツ
4. オランダ

(朝露)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは12月15日です。



《7月号の解答》 7月号の問題の正解は、3. の5月1日でした。すずらんは幸運を運ぶ花。16世紀の国王シャルル9世がすずらんの花束を贈られて喜んだことがきっかけで広まった習慣なのだそうです。図書カードの当選者は、えび天天さん、小納言さん、ナマステさん、東大路優馬さん、ふーさんの5名です。当選おめでとうございませう。(くたくた)

読者がらひひひひ

○オシャレな本特集をしてほしい。

(理学部・えび天天)

——本の中身だけでなく、装丁にも注目できそうですね。私はいわゆる「ジャケ買い」をよくする方なのですが、普段は手に取らないジャンルの本と偶然の出会いがあって楽しいです。新潮文庫の夏限定プレミアムカバーや、角川文庫がてぬぐい専門店「かまわぬ」とコラボしたカバーのシリーズは、集めて並べると本棚が一気に華やかになります。こちらは近代文学の名作ぞろいなのでぜひ！(笑)

○7月号はオリンピックの真っ最中で、TVに釘付けになりがちなところ、「特集/パリ」をもってくる、綴葉編集委員の皆さんが、心にくいです(笑) (いひみん)

——特集テーマに対するコメント、ありがとうございます！映像と文字の両方からオリンピックを楽しんでいただけたら嬉しいです。特集のテーマ案としては、編集委員それぞれ興味や個性が光るものに加えて、毎回時節に合ったものも挙げられています。どのテーマを何月号で取り上げるのがいいか、こだわりながら企画していますので、今後も特集テーマにご注目ください！(くたくた)